

## 巻頭言

## 特別支援教育連携推進グループの「連携」に期待するもの

筑波大学人間系教授・附属聴覚特別支援学校校長 鄭 仁豪

2018年4月、筑波大学特別支援教育連携推進グループが船出しました。2004年、特別支援教育研究センターが設立され、10年間のセンターとしての役割を終え、今年度より、旧センターの役割と機能を引き継ぐ形で、特別支援教育連携グループとして再出発となりました。その役割について、特別支援教育連携推進グループのウェブサイトには、教員研修、連携・コーディネート、理解啓発・交流、連携研究などがあげられています。

昨今の特別支援教育は、対象者の増加とともに、対象者の実態やニーズが多様化しており、保護者や教員の教育観や認識も変化しています。他方、医療技術の進歩による早期発見と早期介入、情報通信技術の進展による多種多様な支援とその可能性は、医療・福祉・労働等の機関との緊密な連携をより強く求めています。同時に、特別支援教育に対する社会の関心も高まっており、社会の状況も、グローバル化や急速な情報化と技術革新などの変化のなかで、地域や社会との連携や協働は欠かせない要素となっています。このように特別支援教育をとりまく状況が複雑・多様化し、内外に向けての様々な対応が求められているいま、新しく生まれ変わった連携推進グループは、どのような理念と方向性を持って、これらの課題に対処していこうとするのか、連携推進グループの役割に期待が寄せられているところだと思われまます。

旧センター時代の研究と教育の成果や課題を踏まえつつ、特別支援教育を取り巻く時代の変化に対応していくためには、連携推進グループとしての新たな使命や存在感を見いだす努力が、連携推進グループのみならず、大学や附属学校にも求められているのだと思っています。それには、連携推進グループにおける「連携」のあり方をどのように捉えていくかが重要ではないかと考えています。大学と附属学校とを繋ぐ関係の役割のみではない、大学や附属学校と協働して成していく連携が必要であり、そのためには、連携推進グループ自身が、明確な理念と方向性を有し、大学や附属学校との連携と協働を形作っていくことが求められているように思われます。旧センターとの大きな違いは、連携先として大学教員や附属学校の存在は変わらないものの、大学の教員が直接、連携推進グループに属しない組織になっているところだと思えます。この変化は、今後の連携推進グループの役割や機能にどのようなメリットをもたらすことができるのでしょうか。

メリットを生み出す組織にするためには、旧センターの役割や機能を精査し、国の研究所や他の同類のセンターはできないユニークな役割を創造していくこと、そのために、様々な課題に柔軟に対応できる機敏な組織を生かすことだと思っています。筑波大学特別支援教育連携推進グループのみにできるユニークな活動にチャレンジし、研究組織である大学と教育現場である附属学校とともに協働し実践していく、特別支援教育を質的に支えて方向付けていく連携推進グループとしての「連携」に期待しています。



## 特別講演会の報告

9月29日（土），「特別支援教育の今日的課題と特別支援学校への期待」というテーマのもと，特別支援教育連携推進グループ主催の特別講演が開催されました。

青木隆一先生（文部科学省初等中等教育局視学官），安藤隆男先生（筑波大学人間系教授）のお二人を講師にお招きして，それぞれの立場からご講演をいただきました。

青木先生からは，特別支援教育の現状，主な施策，新学習指導要領における特別支援教育に関する規定，特別支援学校への期待などについて話を聞くことができました。小・中学校の学習指導要領では，特別支援学級に在籍する児童生徒と通級による指導を受ける児童生徒の全員について，個別の指導計画，個別の教育支援計画を作成することが示されました。今後は，個別の指導計画の作成はさることながら，活用に向けたより一層の取組を進めるとともに，個別の教育支援計画の適切な引き継ぎが課題となります。

安藤先生からは，インクルーシブ教育システムの思潮の広がりにより，小・中学校においては，特別支援教育を受ける児童生徒の数が飛躍的に増えている状況を踏まえ，教育の質の保障をどうするか，教員の専門性をどう確保するか，特別支援学校はどう貢献するかなどについて自立活動の視点から話を聞くことができました。

小・中学校の学習指導要領では，特別支援学級と通級による指導において自立活動を取り入れることが規定され，その際，特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の自立活動の内容を参考とし，具体的な目標や内容を定め，指導を行うことが求められています。ところが，複雑な教育現場の問題は，知識だけでは解決できず，個別の指導計画の作成・活用に役立つ実践的な研修が必要です。そのため，現職教員研修の充実は不可欠なものになります。

お二人の先生から，特別支援学校は，各校のもつ専門性や施設を活かし個別の指導計画，個別の教育支援計画の作成・活用・評価に関する様々な実践を幼稚園，小・中学校に発信するなど，特別支援教育のセンターとしての役割を更に果たしてほしいとメッセージをいただきました。



お知らせ

### 3月セミナーのご案内

これからのインクルーシブ教育の展開を視野に，海外の研究者から教育実践に関わる研修方法とその成果についてご講演いただきます。午後は，附属特別支援5校の実践を中心にポスター発表し，参加者の皆様と情報交換する機会にしたいと思います。

【期日】 2019年**3月27日**（水） 10時より

【内容】 午前 講演会

講師：オハイオ州立大学 Matthew E. Brock 博士

午後 研究交流会（ポスターセッション）

【場所】 筑波大学附属中・高等学校 桐蔭会館

【共催】 筑波大学特別支援教育連携推進グループ

筑波大学人間系インクルーシブ教育システム開発リサーチユニット

※詳細が決まりましたら，ホームページ等でお知らせいたします。

## ● 附属特別支援学校の取組

### 運動会・体育祭での合理的配慮について



2020年のオリンピック・パラリンピックという世界的スポーツイベントをきっかけに徐々に共生社会の実現に向けたスポーツ交流が盛んになっています。

これまでSNE-Tでは、附属特別支援学校の運動会・体育祭において一人一人の子供がもてる力を十分に発揮するための工夫や配慮などを紹介してきました。

本号でも、附属久里浜特別支援学校と附属聴覚特別支援学校の取組について紹介します。

#### 附属久里浜特別支援学校

##### ◆◆量で示す得点表◆◆

子供達がチームの勝ち負けを見て分かるように、青・赤・白のチーム毎に色分けしたブロックを透明筒の中に入れて得点を示す得点表を作りました。閉会式の結果発表では、ブロックを入れる係の子供も、その様子を見ている子供たちも、ドキドキわくわくしながら3つの色の高さが変わっていく様子に着目して、結果を見届けました。結果が分かると、「勝った!」「負けちゃった。残念。」などの感想が聞かれました。喜んだり、がっかりしたりする表情が見られました。

また、今年は、2020年の東京オリンピックに向けて、表彰台での表彰式と金銀銅のメダル授与を行いました。子供たちの誇らしそうな笑顔がたくさん見られました。



#### 附属聴覚特別支援学校

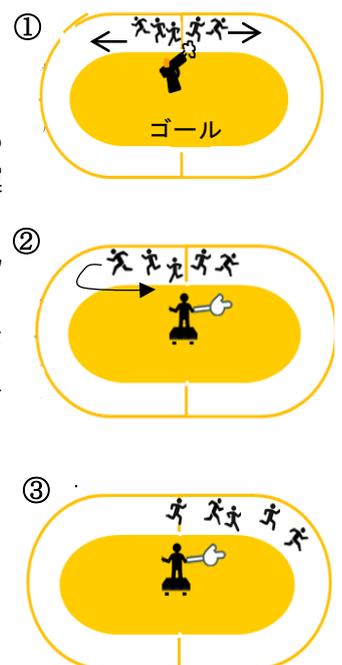
##### ◆◆高等部競技「天国と地獄」◆◆

この競技は、徒競走をアレンジしたのですが、スピードを競うだけでなく運や駆け引きが着順に影響する大注目の競技です。

- ① 生徒達が、スタートラインに並びます。走る方向は左右、自由に決められるので、ピストルの合図と同時に二手に分かれて走り出します。ここが勝ち運への分岐点です。
- ② 数秒後、トラック内に立つ教師が、指さし棒で行く先を示します。もちろん教師は、スタート位置に背を向けているため生徒の状況は知りません。
- ③ 二手に分かれて走っていた生徒達、ここで状況が一変します。全員が、指さし棒が示す方向に走り、ゴールに向かわなければなりません。予測が外れた生徒は、出遅れた分を取り返そうと必死に前の走者を追い掛けます。

他競技で大活躍の足の速い生徒がこの競技では敗北を喫したり、走ることに自信のない生徒が又とないチャンスを得て、先頭を走ったりと見所満載です。

近年、インクルーシブ教育システムの思潮の普及により、幼稚園、小・中学校で学ぶ幼児児童生徒が増えています。運動会や体育祭でも様々な工夫や配慮により、一人一人が活躍する場を生み出すことが可能になるとともに、スポーツの楽しみ方そのものが多様になるのではないかと期待は膨らみます。



# スマートフォンで見やすくなりました！

教材・指導法  
データベース

12月から、教材・指導法データベースをスマホ対応化し、コンパクトな画面でスマートフォンでも見やすくなりました。いつでも、どこでもアクセス可能になり、より一層活用の幅が広がりました。

是非、画面の右上にあるメールからご意見やご感想をお寄せください。



## 新たに加わりました。

教材検索画面、単元・活動場面のプルダウンメニューには新たに「理療」を加えました。そして、眼球の膜構造、心臓の弁膜、中枢神経系の簡略模型、呼吸運動（正常時・気胸時）などの新教材が追加されました。



理療の新教材を  
紹介します。

### 【教材名：呼吸運動(正常時・気胸時)】

赤いハートの風船が肺，下のドーム状のピンクの風船が横隔膜，ペットボトルは胸郭です。

下方の風船（横隔膜）を下に引っ張ると（筋が収縮した状態をつくる），ハート型の風船（肺）が膨らむ様子を観察できます。

視覚で確認できない場合は、まずは下部の風船を取り外した状態の模型を提示し、内部の構造を理解した上で呼吸運動模型を観察することができます。また、ペットボトルの口に頬をあてたり指を突っ込んだりすることで、空気の出入りの様子を確認することができます。

【情報提供者 附属視覚特別支援学校 岸本有紀先生】

※詳しくは、データベースをご覧ください。



筑波大学特別支援教育 教材・指導データベース  
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/kdb/index.html>

理療科の教材だけでなく、小学校理科の教材としても使えそうだわ！



### 【筑波大学附属特別支援5校の研究協議会等予定】

- |                  |                            |
|------------------|----------------------------|
| 1月31日（木）～2月1日（金） | 肢体不自由教育実践研究協議会 [桐が丘特別支援学校] |
| 2月8日（金）          | 知的障害児教育研究協議会 [大塚特別支援学校]    |
| 2月15日（金）         | 聴覚障害早期教育公開研修会 [聴覚特別支援学校]   |
| 2月16日（土）         | 視覚障害教育研究協議 [視覚特別支援学校]      |

※詳細は、各附属学校のホームページをご覧ください。

編集後記

年の瀬間近、SNE-T(エスネット)3号の発行となりました。本年も一年、皆様の御理解と御協力をいただきありがとうございます。新しい元号となる2019年もよろしくお願ひ申し上げます。

発行：筑波大学特別支援教育連携推進グループ  
(社会貢献準備会)  
112-0012 東京都文京区大塚3-29-1  
TEL：03-3942-6923 FAX：03-3942-6938  
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>  
mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp